
誰が為に

ユウサク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰が為に

【Zコード】

Z5426F

【作者名】

コウサク

【あらすじ】

なんとなく人生を楽な方樂な方に転がりながら過ごしてきた男『智雄』 そんなかれの日常が少しづつ歪んでいく。

はじめに・・・・（前書き）

つまらない日常（仕事）から逃げ出したい！そんな思いがどいたのか、彼の前にいろんな『非日常』が転がり込んでくる。

はじまつは・・・

一時間ぶりに見つけたコンビニの駐車場でやつと出コーヒーにありつけた。

フルタブを捻つてダイレクトにじっくりやる。喉が渴いていたのといつもの水筒（コーヒーが入った）を忘れてしまい、しかも・・・こんな田舎に来るので途中で買っておかなかったのが悔やまれた。

現在地は・・・ナビをつけていなこのでよくわからないが、おそらく富崎県のどこかだ。

社内の他の連中は

「ナビがないと不便だろー？」

だとか

「金借りてもつけりよー」

などと好き勝手ぬかしているが、スーパー・マップル一冊あれば大概の場所にはいけるし、なによりこの仕事自体、あまり長くするつもりもなかつた。

片山智雄は福岡（九州の一一番上）に住んでおり、会社の事務所も当然福岡である。しかし会社の営業がカバーするテリトリーが何ともざつくりしている。『九州』なのである。

端から端まで移動すれば400キロはある。高速を利用しても4時間以上かかる場所もある。

それまで事務用品の企画室にいた智雄は『営業』という仕事も知らなかつたし、どういう頻度で運転や移動があるのかも入社研修があるまで把握していなかつた。

もともと車の運転が好きでドライブなら何時間でも苦にならなかつた。

運転手という職業に絞ると、乗りたくない車で長時間過ごさなければならないが、この会社は『自家用車持ち込み』だつた。それが応募した理由でもあつた訳だが・・・

半年もしないうちに愛車とは別に中古で軽自動車を購入するはめになる。

一ヶ月で10000キロ以上移動するガソリン代も原因の一つだが、愛車が痛んでいくのが耐えられなかつたからだ。

愛車は昭和62年式いすゞジエミニ・イルムシャーダー、コンパクトな4ドアセダンで、排気量はわずか1500cc車重は960キロで馬力は140PS（DOHCでもなくいわゆるディーカンターボというやつ）

免許を取得したのが24才。それまではバンドを組み音楽活動に精を出し、バイクで食いつないでいた。就職して最初に買った車がこのジュミニである。

以来丸7年この車に乗り続けた。軽い車体はスタートでマツダRX-7を抑え込み、純正で装備されているハイパワースイッチを押せば100キロからでも後頭部をレカロシートに叩きつけるような加速Gを味わってくれた。平成12年の今となつては製造されて14年目の古い車だが智雄は買い直す気などまったくなかつた。

そして現在、中古のアルトワークスにもたれて缶コーヒーを持ちたばこをくわえながら地図を広げた。

燃費で考えるならばターボのないモデルにすべきだったが、『5速マニュアル』にこだわって探した結果、予算と車の程度の折り合いがつくものがこれしかなかった。

「げえつ・・・・遠いなあ」

次の目的地と現在位置の確認を終えてから事務所に連絡をいれた。今日はそれで最後の訪問。終われば一皿散々に高速で福岡に帰宅する。

「いめん下せー・・・・」

「ああ、あんたが・・・・今度は買わんよ！…だいたい半年に一回は訪問指導とかゆうて・・・毎回なんのかんのと買わせてからに。」

「いやあ・・・・おかあさん？！毎回？前回もなにか買ったんですか？」

「クロレラー！一年分とかいつだから・・・・」

「ああ、そりなんですね。・・・で？今回は健康チェックですけど、なにか最近気になる事とかありますか？」

「なんも・・・・なんもないんやから今日はもうよかよ！」

「なんもない？！・・・本当に何にも気になる事ないんですか？」

「ああ！なんも！」

「……じゃあ、やっぱりクロレラ飲んでるからじゃないですか？」

「はあ？！」

「だつてここに資料あるけど最初は夜寝付けない、トイレが近い、手足のしびれって・・」

「確かに最近はよかあんばいやけど・・・」

「じゃあ続けていきましょうー・・・ね!」

「ああ、それは高い買い物なんやから飲むけど・・・」

「今は…何をどの位飲んでましたかね?」

「回2」田中・・・れど

「それで・・・ひざの痛みもあつたよつですけど、それはどうなつてます?」

「ああひでなーー！」は・・・まだ階段の辛いなあ

「判りましたーじゃ、レッчиは日本一回で結構ですか、レッчиを毎食前に一回ー田3回に変えましょー。」

「でも」いつまでもうべべ終わるからなあ……」

「ああ、やつですか……。ビルでまあまあヒルつか?」

「飲んだ方がいいんじゃろ?」

「そりゃあ……飲まないよいつ飲んだ方が……しうがな
いなあ……内緒に出来ますか?」

「なにを?」

「僕らはねおかあさん、みんないつまでお婆さんとのひに回つ
て、これはいつやって飲むとか、いつはこのぐらこ飲んだ方が!
ついついじゅ? 実際に給料から買って飲んでるんですよ。」

「へーそりがー、……で?」

「だから今日は内緒にしてくれるなら、僕が社員価格で買ったもの
をまわしてあげます。2割引で。」

「そりゃあありがたいが……あんた困らんかね?」

「なんとかしますよーじります?」

「じゃあ分けでもうおつかね。」

「判りました。じゃあ待つてねー。」

そこまででいつたん会話を辞めて智雄を携帯をもって車のところまで
できた。

「あ、お疲れ様です。片山です。ええ古川さんの家です。OKです。
2割引きで・・ハイ！ええ、たしづらくはもう難しいでしょうね。
・・ハイわかりました。あ、はい代引きでお願いします。」

『ふーっ・・・』

溜息をひとしきついた後再び玄関からほこる。

「おまたせ、おかあさん・大丈夫だよ、うまく言つといたからね」

「すまんね・・・じゃあ一年分もりやるかね？」

「ええつ？一年分ならこれだけど・・・」

手元の電卓をかちやかちやとぱじへ・・・

「いいの？割引つていても結構するけど・・・」

「いいよーあんたがせつかへ言つてくれるとやから。現金でもいいかい？」

「・・・じゃあ、車の商品といつぐるから待つてて」

慌てて、会社に電話して現金との変更、そして商品の追加をもつし
である。

もう辞めたい・・・それが最近の正直な気持ちだった。

商談が旨く行くたびに『まるで詐欺師だ』と自分自身を責める。しかし商品が売れない事にはガソリン代だけで給料が無くなる。歩合をすこしでも稼がないと借金も減っていかない。

帰りの高速でパーキングに依り電話をかける。

「ああ、聰君？おれ智雄！今日帰つたらいくから！店多そう？」

友達の経営するバーに連絡を入れた。

まつまつ・・・・（後書き）

とつあえず見切り発車です。なんとかゆうべつ（2週間に1回）ペースで更新していきたいと思っています。

変化（前書き）

仕事をこなし、ただ毎日を過ぐす智雄は、友人である聰の経営する
バー『saint・wave』の常連、羽野亜希子とお近づきにな
るが・・・

変化

結局、博多に戻ったのは23・30過ぎだった。

(遅くなつたなあ・・・明日もあるから聰の店も2時間くらいしか居れないな)

もともと智雄は酒をほとんど飲まなかつた。若い頃から事ある毎に

「飲め！飲んで鍛えろ！」

などと上司や友達には言われてきたのだが、身体がアルコールを受け付けないらしく、無理して飲んでも体調を崩すだけの事で、いつしか付き合いでもはつきり酒を断るようになつていた。

・・・結果、上司を袖にするけしからん部下として社内でも有名になり孤立していく。

専門学校卒、口ネなし味方なし、入社5年目にして配属替えで企画室から倉庫番に飛ばされたのを機に転職したのはそつした経緯からだつた。

部屋に戻つてからスースを脱ぎ、着替えをしながらテレビをつけると報道番組らしく、今日一日のニュースをダイジェストで流してい

た。

なにげなく聞き流していたのだが・・・気がつけばテレビの前に釘付けになっていた。

聞き覚えのある会社の社長が記者会見を開いていたからだ。

(株式会社オリオン健康！商品偽装の容疑で社内および役員宅に家宅捜索)

「…………おいおい！…………つちの会社じゃねえか…………」

ニュースでは社長が机に頭をこすりつけ懸命にお詫びを述べていた。テロップに強引な商法など余罪も追及と書かれている。

「は～っ・・・・・。」

以前から商法（販売のやり方）については消費者センターなどから再三の注意を受けていた。

まあ、幹部連中は

「なんてことない！なにも気にせずに売りまくれ！」

などと相手にもしていなかつたが・・・その強硬策がどうやら裏目でてしまったようだ。

明日からの事を思つと憂鬱な気分になるが、ひとまず自分のような末端の社員になにか容疑をかけられる事もあるまい。無理やりそう結論づけて智雄を1DKの部屋を出た。

「いらっしゃい……でも何とか……ほらせりきつ今日。」

「いらつしゃい……でも何とか……遅かつたな。」

苦笑いで自分の腕時計を聴に見せるが、針は11：57を指していた。

「さつきまでエリカが優香ちゃんと待つてたのに……」

「まつてたのはエリカちゃんだけだろー優香が俺を待つわけがない。」

「

鹿屋エリカは聴の元妻。昨年離婚した。子供は一人、聴が実家で育てている。そして……木之元優香は智雄の元妻で、なぜか二人はお互いが離婚して他人になつてから交流を深め、聴とはよく顔を合わせ、この店もよく利用している。

しかし、優香は智雄を避けていて、離婚してから3年になるが一度も会った事はない。

（もつとも智雄のほうも、今更話すこともなく、煩わしいだけなので困る事も今のところない）

専門学校時代に合コンで知り合った優香とは、身体の相性もよく付き合って2年で結婚したが、優香の親とは折り合いが悪かった。優香の実家がちょっとした資産家で会社を経営しているというのは聞いてはいたが、跡継ぎの婿を欲しがっていたのは結婚するまで聞かされていなかつた。

新婚旅行のハワイからついたその脚で優香の実家にいった・その時にこきなつこう切り出された。

「半年ぐらいしたらマンション引き払って、うちの名前に変える。仕事も辞めて、うちの稼業の研修にいけ」・・・・。

突然の申し出に、すぐ返事が出来ずにこまつていると

「自分が婿に入るのがいやならすぐ子供をつくつてうちの籍にいれればいい」

その場で返事はしなかつたが、あまりにも一方的な物言いにかなり気分を害した智雄は、飲んでいた事もあり、黙つて泊まりはしたが、翌朝、朝食もとらず優香もおいて自宅に帰ってしまった。

今思えば大人気ない行動であり、これが優香の親との決定的な亀裂

のはじまりでもあった。

それから智雄は向こうの実家にはほとんど顔もださず、妻にも避妊を続けて離婚までの3年間妊娠もさせなかつた。せめてもの抵抗といえばますます子供っぽい行動である。

結局、相談もせずに仕事を辞めた事、子をなす気持ちがない事、そして車道楽での金使いの粗さなど、先方からすれば本人同士がぎくしゃくさえすれば離婚にもつていく理由はいくらでもあつた。智雄自身、あまり家庭を顧みるタイプではなかつたし、離婚の話ができる前あたりから優香にも男の影がちらつくようになつてゐた。一月ばかり形だけの協議が行われ、その後びっくりするほどあつたりと離婚は成立する。

「まあ、そういうなーたまには会つて顔みて話すくらいバチはあるんだわつ・・・」

「聰のところはエリカちゃんといまでもいい関係だからいいけど・・・俺達は。」

「まあいいまあいい！またウォッカか？ズブロッカとボンベイサフアイヤがキンキンだけど」

「ボンベイサファイヤで」

表面に霜がふつた綺麗な色のボトルから注がれる液体に視線をとめてぼーっとしていた智雄に聰が声をかける。

「疲れてんな・・・どうした?」

「いや別に・・・別にでもないか、さつきコースみたらうちは社の役員が逮捕されたって・・・」

「えっ? なになんで? 詐欺? 恐喝か?」

「ひどいな、たしかに俺達は詐欺師みたいなやり方で年寄りから絞りとつて給料貰つてるけど・・・今回は表示偽装らしいよ。多分瓶のラベルや梱包してる箱に、いかにも『医薬品』ですみたいにもつともらしい事書いてた部分が、原材料を偽装してたか・・・明日事務所についてみないと判らないね・・・」

「あら・・・お久し振り」

気がつけばカウンター二つ隣りの席にショートボブの女性が座っている。

「マスターも片山さんも話に夢中なんだもの……驚かせた?」

慌てたのは智雄より聰の方だらう。まったく気がつかなかつた。

「すみません……亜希子さん、いつもので?」

「うーん……今日は飲みたい気分だから……片山さんと同じので……ウオッカだよね!」

「かしこまりました。」

小柄といえば小柄、身長はおそらく……155センチくらいか、年齢は、まったくわからない20代前半か、後半? イヤもしかして30代なのか……

その不思議な女性は、羽野 亜希子。聰の店『Barsaint・wave』の常連である。

まだ昼時などは汗ばむ、名ばかり秋という季節にワンピースにブーツという出で立ちは、季節の先取りをしないといけないアパレル関係で働いている。という想像にいきつく。

何度か話した事はあるものの、聰は一人で飲みに入る女性客には極力他の客(特に男性)には近寄らせない。智雄もその美しい彼女とお近づきになりたくてもマスターのガードが固くて、まだなんの予備知識も持てないでいた。

(だがそういう配慮があつて女性が気兼ねなく一人で飲みに来られるのも事実なので仕方がないとは思つてゐる。)

「ねえ、今日は片山わんしかお客わんいないんだね……となり、いい?」

そう畠希子から提案されて智雄は聴を見る。“うんうん”とうなづく聴をみてから

「どうぞどうぞ…畠希子さん」

笑顔で招き入れた。

(あ、頭いてーっ…飲みすぎたんだよなタベ…俺、いつ帰つたんだっけ…?)

ガバッと起き上ったそこは、あきらかに知らない部屋だった。部屋のディスプレイやカーテンの色…確実に女性の部屋である。智

雄はベッドに寝ていた。しかも裸だ。

(思ひ出せー思いだせー俺)

昨夜一緒にいた女性といえども・・・・・亜希子しかいない筈だ。

しかし・・・・・どうせいつてこいつなったのか・・・・自分の身体を見てみると・・・これは・・・・どうやら清廉潔白ではない様子だ。ベッドも一人ではなく一人で寝ていた形跡があり、また智雄の物ではない髪の毛が枕付近に何本か見える。

・・・・・・・・・やつちやつたな、俺。

「あー！よかつた起きたのね？」

声のする方をみれば・・・・田の置き場に困る亜希子のバスタオル姿。どうやらシャワーを浴びていたようだ。（予想を上回るグラマラスさに田はくぎ付けなのだが）

「え、あ、・・・・・あの・・・・・」

「覚えてる？昨日の事。」

「いや・・・なんていふか・・・・・

「嘘ー？本当に覚えてないの？」

「う・うん、まだ頭も痛くて・・・あんま記憶ないみたい。」

「あ、いいや、朝あんま時間ないんだ! とつあえずトーストとコーヒーしかないけど食べて! 夜は・・・とも・お・さんたはシャワーしてないから浴びてきたら?」

なぜ名前を強調して呼ぶのかもわからないし、意地の悪そうな、それでいて色っぽい含み笑いにおびえつつ、智雄はトーストをホールで流しこみ、追立てられるようにバスルームに飛び込んだ。

頭からシャワーを浴びながら、徐々に昨夜の行動を思い出していった。聰と3人で1時間ほど楽しく話して飲んでいたが、そのうち2組ほど他の客が入り、聰は忙しくなって一人で話すことになった。
それから・・・

「ねえ、もう出れる?」

いきなりバスルームのドアが開き畠希子が顔をのぞかせた。

「うわあッ!」

慌てて前をかくすものの・・・

「なに恥ずかしがってるのよーもうお互いさまでしょ! それより・・・今朝は会議でゆっくりしてられないこの、せかして悪いんだけど・・・すぐに出てたいんだけど・・・」

「ああ、わかった。もう出るよ。」

結局それから10分ほどで畠希子のマンションを出た。

「……ふふ、まだほーっとしてゐみたいね、せかしちゃつたから埋め合わせに晩御飯一緒に? 飲むから……覚えてない事で聞きたい事もあるでしょ?」

「ああ、もうだね……じゃ仕事おわりに連絡し合おうか? アドレスと番号聞いても?」

「や二まで忘れてると怒つをとおつこしてあきれちゃうわね……昨日交換したヨー・畠希子で入ってるはずだけど……」

「えつ・・・もうか・・・」

慌てて携帯のアドレスを確認する。確かに入っている。

「じゃー夜ね!」

「ああー!」

時計を見る。（こまから自宅に歩いて、着替えて会社につくのが・・・
・ぎりぎり間に合つ）

・・・一瞬、彼女の残り香が香ったきがした。上着を脱いで嗅いで
見た。

シャネルN°5・・自己主張が彼女らしい、と思いだし笑いをしな
がら歩く智雄だった。

変化（後書き）

なんかいつこいつシチューハーシヨンで『記憶がない』という経験はありません。覚えてないふりをした事はあります···でもいい女との情事を忘れるのは···もったいないですよね。（笑）

渦中（前書き）

飲んだ勢いで身体の関係をもつた（らしこ）畠希子との関係は？自分
の働く会社も先行きが解らない・・・

会社に着いてから事務所に入つたが、想像していたような騒ぎなど何もなく・・・

まるで昨夜のニュースが夢だったのかと思つほど社員も全員そろつていた。

新聞社やテレビ局なんかが玄関前にじっと返してゐるんじゃないかとも思つてゐたが、やはり騒がれてゐるのは大阪の本社だけのようだ。（マスコミなんかいやしねえ・・・）

いつもと違つてる事といえば、社員のスケジュールに行先が書き込まれていらない点だけだった

いつものように事務員が入れてくれたコーヒーを飲みながら自分のデスクにかけると、支店長がいきなり立つて喋り出した。

「全員そろつたようなので、我が社の現状をお話したいと思います。先日、報道で取り上げられましたので、みんな知つてているとは思いますが・・・今回、商品の説明文についての『違反』がある！という事で、役員数名が身柄を拘束、そして家宅捜索を受けております。その他ではなにもおどがめは受けておりません。しかしながら各方面、特にお客様からの問い合わせが殺到しておりますので、本日より1週間は営業の諸君も定時まで電話対応をしていただきます。対応については、マニュアルを用意させて頂きましたので、こちらにそつて各自で行ってください。以上」

確かに、いつになく社の電話が鳴り続けている。もともと事務員が3人、営業が10人、電話のアポ担当のスタッフが15人いるのが・・・それだけでは足りないらしい、というよりも、こんな状況で訪問できる家などないというのが本音だらう。

色々と聞きたい事もあつた智雄だが、とりあえずはマニュアルを手にとつてみた。

『この度の報道に関して』とある。

- 1、報道に関しては、商品の説明文に不備があつた為の警察介入であり、商品については何の心配もなく安心して使用を続けてもらう。
- 2、報道にあつた内容で商法など余罪があるなどは事実無痕であり、現在調査中である。

3、開封されたものに関しては出来ないが、無開封の商品の返品、また契約解除に関しては 速やかに社員を『自宅に派遣して行う。

(『速やかに社員を派遣』ねえ、ははあ・・・営業にクーリングオフを止めさせるつもりか。)

内容を読んだだけで憂鬱な気分になつた。

誰だつて、こんな騒ぎになれば返品したいと思つに決まつてゐる。これじゃますます信用を失うばかりだ・・・幹部連中はこの期に及んでまだ自分達がおかれた立場を理解してないようだ。

(この会社もいつまでいられるかわからなくなってきたなあ)

目の前の電話がけたましく鳴り始める。智雄は覚悟を決めて電話に出た。

「ハイ！お電話ありがとうございます。オリオン健康です。ハイ、ハイ、その件に関しては……」

昼の休憩は事務員と交代で回した。3まわり目の智雄が昼飯にありつけたのは午後2時をまわってからだった。

事務所をでて近くの定食屋に向かう。携帯を見るとメールが2つ着信が1度あった。

すべて亜希子からだった。

内容は今晚の待ち合わせ場所と、何が食べたいか連絡が欲しい、というものだった。

とんかつ定食を頼んでから亜希子にメールを返す。

『今日は内勤になりました。おそらく定時で帰れます。亜希子さん

は何時頃までお仕事なんですか?』

考えてみれば、智雄は亜希子の仕事はあるか、年齢も好みも何も知らない。にも拘わらず酒のせいでの朝の体たらく……あのぐらいいい女であれば、酔った勢いではなくキチンと口説き落として素面で抱きたかった。まさか昨日の今日でまたどうですか?などと誘うのも……大人の男のする事ではない。

休憩は1時間ある。定食を食べ終えて、コーヒーでもとメニューをみたが、近くの「コーヒーショップ」にいつて飲むほうがリーズナブルだし、味も幾分ましだろう。と思い立つて席を立ち清算をすませた。

智雄がドトールに入つてアイスラッテを飲み始めた時にメールが来た。

『5時?ずいぶん早いんだね、私は定時が8:00なの……だから待ち合わせは大名で8:30ぐらいが都合がいいんだけど……いかが?』

『大名ならば』bar saint · wave』が都合がいいのだが・
・・・

聴に余計な勘ぐりは入れられたくない。どうしたもんかと思つていると、またメールが、

『saint · waveが行き辛いなら、もう一本奥の通りにある(table · spoons)でどう?あそこなら食事もそれなりだし、待ち合わせして移動してもいいし・・・返信まつてます。

亜希子』

気遣いが嬉しい。嫌味でもなくこちらの気持ちも考えててくれたメールに感心する智雄だった。

(こんな女と結婚したかった。ただのセフレって感覚でなく、向こうにその気があれば『付き合ひ』つてのもありかもしない。)

『了解! その時間にtable・spoonsに行きます。』

もともと気になっていた女性なだけに、俄然、彼女に興味がわいた。

とにかく、今日は彼女の事や昨夜の事をはっきりさせよ! -

渦中（後書き）

とつあえず、出来る事から前に進むしかない様子です。
意外と早く更新できました。次回からは不定期と宣言しておきます。

唐突（前書き）

仕事はお先真つ暗、でも気になる女との出会い。

これって・・・運命なんかじゃないよね。

定時に仕事を終え（といつても電話対応していただけだが）

智雄は皿やに戻った。向こう一週間はこの作業が続くらしい……。

部屋に入ると、溜まっているテレビ番組のビットオを見始める、なにしふう時間つぶさなければ亜希子の指定する時間にはならない。

智雄はまるで高校生の頃、女の子を待っている時のような焦燥感によるものか、時間の流れがやたらと遅く感じていた。

やがて、あまり集中できないバラエティ番組を見ながら、智雄はソファーで眠りこけていた。

田が覚めると辺りは暗い。テレビの灯りが眩しい。

(しまつた!)

慌てて部屋の灯りをつけ時間を確認する。幸いにもまだ7時過ぎだつた。

テレビもまだ大人が見るような番組もやつてはおらず・・・シャワーをあびようかとも思つたが・・・もつ季節は秋、冷え込んで風邪などひくのも馬鹿馬鹿しい。

部屋着からジーンズとTシャツの重ね着、パークーというかなりの軽装で部屋を出た。

コンビニに入り、雑誌をパラパラとめくるも興味が湧かず、結局ガムと缶コーヒーを買って部屋に戻る。コーヒーは自分で入れようかとも思つたが（豆はまだあつた）出かける前に洗い物が増えるだけで気分が落ちるのでやめた。

コーヒーを飲み、煙草を2本吸い終えてもう一度着替える。一応、仕事帰りのO-Lとのデートの約束なので、少しタイトなレザーパンツに履き替え、Tシャツにジャケットという出で立ちでブーツを合わせた。玄関の姿見で全体を確認（本当に久しぶりにこの鏡を使つた。いかに女つけがない生活をしているか、智雄は実感する。）

歩きだして、伸びすぎた髪を向かい風にあおられながら（整髪料くらいいつければよかつたかな）

などと思いなおすが、わざわざセシティに戻るほど髪型にこだわるほうでもない。

tab1e・spoonsにいたのは20・15。待つのも待たせるのも嫌いな智雄としてはベストな時間だった。

「ロナビールを注文してカウンターにかける。ライムを瓶に押しこみ一口つけたところで

「おまかせしました。」

振り返ると田のストライプワンピースにヒールを合わせた畠希子がいた。

驚いた・・・思いつき好みの女が田の前にいた。

「ワンピースだったんだ・・・朝はどんな服装だったか、全然覚えてなかった。」

「田の前で着替えましたけど?」

「・・・だよね・・・」

「なに見惚れてるのーおとなりいじですか?」

「・・・あつ・・・ビーバー。」

となりに座った畠希子は

「キール」

と注文した。バー・テンダーはつまづこいつから始める。

「いやあ、びっくりしたな。やつこいつコンペースが好きでしゃべる似合ひてるよな」べ。」「

「ありがとつ……でも、いりこりうのが好きなんだつて、昨夜も聞いたわよー。」「

「……えつ？……そんな話までしたんだ。……でも、じゅあそれでわざわざねへ。」「

そういうながら智雄は畠希子の服を指差した。

「やつややつよーじやなかつたら着ないよ。これ先週着たばかりだし……ていうか・・ほんとになんにも覚えてないんだねー?」「

「いや、何にもつて事もないけど……」「

「でも部屋に上がつてから、30分程寝てたと思つたらいつの間にか勝手にクローゼットに潜り込んで、服の駄目だしし始めて・・挙句こはあたしの下着までみて『いりこりうのが好き』つて・・・

「ちよ、ちよっと待つて！？クローゼット？勝手に入つて？？」

「そうだよーー！あたし、前から片山さんの事気になつてたから、部屋に入れちゃつたけど、もしかしてこの人危ない人だつたのかなあ・・・つてちょっと後悔したんだからー！」

「・・・それは・・・その、申し訳ない！」

智雄はその場で頭を下げた。

それから簡単な食事を注文して食事になつた。

前菜の盛り合わせ、パスタ、フオカッチャ、どれも美味しく満足のいくものだつた。

もともと智雄は食事の時は極端に無口になる。なので当然話が弾むわけもなく・・・一人してもくもくと食べた。

バーテンがエスプレッソを運んできた時に智雄は切り出した。昨夜の話の続きを聞かねばならない。

「・・・で、その先つていうか、その後の事は・・・」

「そこまで言わせる？」

「できれば・・・お願いします。」

素直に頭を下げる。

「ふふ・・・まあこいわーそれからもつ一回飲もうって言ひだして・
・・冷蔵庫からビールを出して、飲んでるうちに、仕事の事とか、
音楽の事とか、あつそういうば、昔バンドやってたんだね聴さんと
！そして最後に別れた奥さんの事・・・その時に泣きだしちやつて・
・・」

「うわー・・・我ながら最悪ーよく追に出せなかつたね。」

「まあ、そのあたりまでくるとね、なんだか・・・」めん本人曰の
前にしてなんだけど・・・可愛くなつてきちゃつて・・・うふふ。

そういうながら畠希子はアルコールの為か、それ以外の理由かは判
らないが顔を真赤に染めて言つた。

「・・・で、酔っぱらつてゐるのかな?と思つてたら、急に抱きしめ
られちゃつて・・・あたしも酔つてたから。ていうとするこよね・・
・最初からもちろんそのつもりだつた訳だし・・・」

「いやいやあることが、全然そんな事考えてないし・・・俺も畠希
子さんの事ずっと気になつてたから・・・」

「またまたー酔つた勢いで抱いちゃつた女に気を使わなくてもいい
のよー。」

「勢い?ー・・・そらまあ・・・結果としてそつかもしれないんだけど
・・・実際どうなの?おれの事、今回の事で意識してくれたの?
それとも幻滅した?」

「ううん。幻滅はしない。」

「よかつた。……で、亜希子さんは今、特別な人とかいないの？」

「それ酷いなあ……こののに男連れ込んだじゃうんだ……あたし。

」

「いやこやんうじやなくて……確認してんだか……その、出来れば……」

いきなり携帯の着信音。

液晶を見ると……

「あひやー……聴からだ。ちゅうじめん」

智雄は一回店から出てかけ直した。

「おうーお疲れ、今日来る?」

「いや……今日は予定してなかつたけど……」

「今ビリ?あとで寄れない?」

「……なんか話でもあるの?」

「うーん、あるひや あるかな?」

なんとなく亜希子との事につっこむかな?と心配になつた智雄はどうえず行く事にした。

「いや実は、今近くで飲んでるから……ちよつと抜けてそつこくわー！」

店に戻ると畠希子が清算を済ましていた。

「あれ？ もう帰るの？」

「聰也んからは？ 何だって？」

「ああ、なんだか判らないんだけど……ちょっと寄つてだって。」

「そつか……じゃ帰ったほうがいいでしょ？」

「えつと……まだ話したい事があるんだけど……明日も早い？」

「…………わかった。……じゃあ、部屋で待ってる。終わったら来てー！」

「いいの？」

「結構、恥ずかしい事いつてるんだから！ 何度もいわせないで！ 智雄さんが来るまで起きて待ってるから。早く来てねー！」

「うん解った。」「

小難しい駆け引きなんかない。亜希子のストレートな物言いに・・・

智雄は

(ああ、俺この人に惚れてるな)

と実感する。

実はすぐそこで飲んでた・・・などと聴に言うのも気がひけるので、コンビニで10分ほどひまをつぶしてから saint · waveに入った。

「おお・・・来たか！座れ座れ。」

聴に示されたカウンター席を見て凍りついた。

別れた妻、木之元 優香がそこにいた。

唐突（後書き）

天災と前妻は忘れた頃にやつてくるんでしょうか（笑）

回想（前書き）

亜希子とのトーク中、聰から呼び出しをうけた智雄。そこには別れてから一度も会つた事もない優香が待っていた。

固まつて居る智雄に聰が声をかける。

「どうした? はやく座れよー。そんな感じで立つといわれると歯院のじやまなんだけどな」

「あつ・・・・・」めん

導かれるままに優香のとなりに座る。先に声をかけられる。

「久し振り。元気そうね」

「・・・・・うん。まあね。」

「それだけ? もうひょっと愛想よくできないの?」

「なんの為に? ・・てか、用事があるって? お前?」

「お前? うう? あいつじゃない? せめて優香、とか名前でよんでもくれない? もう夫婦でもないんだし」

「・・・・わかった。・・・で? なんか用ですか優香さん?」

「まあ、いいわ。特別用事つて程じゃないんだけど。あたし・・・・・結婚するの。」

「…………で？」

「でつて……一応、智はまだ一人みたいだから、報告しといたほうがいいかなって……」

「そんな報告とかいちいち呼び出すな！だいたい電話でも済むだろ？」「…………」

「何回電話しても出ないじゃない。」ひたすらの度に心配してくるんだからー。」

「ほつとけー関係ない赤の他人なんだからー。」

「おこー今はお前が悪いー。ちゃんと優秀ちゃんの話を聞いてやれー。」

聴からそつ言られて苛立ちながらも黙る智雄だった。

「仕事とかどうなの？つまへこつてるの？……痩せたみたいだけどじー飯食べてる？」

「…………」

「嫌われちゃったかな……」

「…………どじーのどんな奴と再婚するの？」

「気になるんだ、そういうのー。」

「言いたくなければ別に……」

「ウソウソ、……離婚して付き合つてた相手とはね、すぐ切れたんだけど……その頃職場の年下の男の子から結構熱烈にラブコールされてね、その時は相手にしてなかつたんだけど、さすがに一年以上ずっと言われてたら……ほだされちゃつて……で、うちのお父さんも気に行つて、後をついでもいいつて話になつた訳！まあ、相手の『両親はあんまりいい顔してないんだけど。』

「よかつたじやん。婿養子と仕事の跡継ぎさえ決まればお養父さんはいい訳だから。」

「そんな風に言わないで！智に嫌な思いをさせたのは事実だけ……・あたし達つてそれだけで別れた訳でもないんだから。」

「まあね。」

「言つたかったのはその事と、……智ひとりで住んでるんだって？」

「ああ……」

「お養母さん大事にしなさいよーもつら8才でしょ？なんで一緒に住んであげないの？」

優香は智雄の母親とは非常に仲がよかつた。傍目からみたらそつちが本当の親子にみえた程。

そう言ひついで、帰ってきたばかりの智雄はまた車に乗つて出掛けてしまつた。

「一人そろつてめんべくせえ・・・もつこー・」

「智雄……わつきかから子供みたいな事ばっかり言つて、優香さんの気持ちを少しは考えてあげなさい……」

「だつたらもううきらなくなつてこよ・なければないで適当に食べるがいい。」

「だから、よそで浮氣してようが、彼女作ひしが好きにじてこいつていつてゐじゃない！ただ連絡してつていつてるだけ！あたしとお養母さんもい飯つくつて待つてるんだよ！」

「俺がどこのが！何時に帰る？が俺の勝手だろ！？細かい事ばっかりいやがつて！」

まつ。

ここ半年、夫婦仲はうまく言つてなかつた。

優香の父親と不仲になつてしまい、何とか仲直りをしてほしい、と願う優香だったが、智雄はそれが理解出来るほど大人ではなかつた。何度も繰り返されるその話題からいつしか逃げるようになり、しまいには家に戻らない日さえあつた。

その度にこんな喧嘩になつてしまい、自分の大人気なさに気づきいつも素直に謝る事さえできない。夫婦生活も次第に無くなつていき・・・このままでは離婚という文字もちらつき始めていたが、そうなつてもいい・・・智雄はそう考えていた。・・・あくまでもその時は。

次第に夫婦の会話もなくなり、休みの日も智雄は行先も告げずに出かけてしまつ事が多かつた。

それでも優香は健気に食事の用意をして智雄の帰りを待つていた。

けれども智雄はそんな優香の気持ちを踏みにじるよつに無断外泊を繰り返し・・・

次第に優香の気持ちは乾いていった。

その事に智雄が気がついた頃はもう手遅れで、すでに優香には他の男の影が見え隠れしていた。

それからは坂道を下るよつに『離婚』への手順を踏むだけだった。

「ねえー！聞いたらの～お養母たこと暮らしてあげてー。」

「・・・ああ、覚えておくよ。」

「またーそんなこと言つて・・・やひこしてもかくへだめなーの～。」

「・・・むう・・・まつとこへくれー・・・・とにかく結婚おめで
といへ。今度は幸せになれるといこな。」

「・・・あ、ありがと。・・・あなたも、むうと自分やお養母
さんを大事にしてね。」

わとじて手を振り、智雄は saint · wave を後にした。

回想（後書き）

昔の事を思い出し、優香と別れた智雄
・
亜希子の待つ部屋には？

本音（前書き）

元妻である優香の再婚話を聞き、興味なさそうに強がって一人 *s a i n t • w a v e* を出た智雄が会つたのは・・・

本音

saint・waveから出た智雄だが、軽く沈んだ気持ちのままで、すぐに畠希子の待つマンションに向かう事は躊躇われた。

どうしたものかと考えながら大名から天神方面に歩いていると・・・

「あれ！？どうしたの？・・・一人？」

田の前に聰の元妻、鹿屋エリカが立っていた。

173センチと、どちらかといえば小柄な智雄とはあまり目線が交わらない。そのスラッシュした立ち姿に人目をひく日本人離れした高い鼻と厚めの唇。その上のことなく人懐っこそうなくりつとした瞳・

・・とても子供を産んだ女性には見えない。

（あらためて見ると、本当に『美人』だよなあ・・・なんで別れたんだろう聰のやつ）

・・・と、一瞬見惚れた智雄だったが、しかし質問に答えてない事に気がつき慌てて返事をする

「えつ？あ、うん・・・今saint・waveから出てきたところ・・・Hリカは？これからいくと？」

「ええ。・・・じゃ・・・・会つたんでしょう?」

「・・・ああ、うん。」

「ねえねえ、どう思つた? 元女房が再婚するつて聞かされて。」

「別にどうもいいもないよ・・・ああ、『そつなんだ』って・・た
だそれだけ。」

その話題に触れられるのは何となく嫌だつた。心から祝福できてい
ない自分。

その内面をエリカに悟られまいと視線をそらしていつも答えた時・・・
・智雄は視界を遮られた。

口元に少しタバコの香り・・・”柔らかな唇が触れていた。”

「ちょ、ちょっとー!・・・なにしてるん・・・」

「『めん。びっくりした?・・・だつて智君・・・今にも泣きだし
そうな顔してるから。可愛くつて・・・つい。』」

ペロリと舌をだして笑う。

「・・・ついじゃねーよーだいたい俺とエリカがこんな事したら聰
だつて、優香だつて・・・」

「何にも言わないよ。 だつてもう恋人でも夫婦でもないんだよ！！」

「…………そりゃあ…………うだけど。俺、エリカとそんな事するつもりないし……」

「あらー・・・あたしはやうなつてもいいこと思ひてゐるが?」

「えつ？」

今まんざらでもないって顔した。ふふ

「なんだよ!! なにからかでるんだよ!! 趣味わるいな!!」

「うつん。からかってる訳じやないの。智君とそうなつても好いつて言つたのは本当……ただね、優香の気持ちもわかつてあげて！あの娘は本当に智君が心配なの。聰の店に行き出したのだつて、もともと智君の様子を聞きたかったからなんだよ！？解つてる？」

—そりやないだろ。だつて俺がいつた時はいつも帰つてゐし……

「それは智君が聰やあたしに『会いたくない』って言つてゐのをきいてるからじやないの？優香は本音を言えれば、もう少し・・・そう、例えば友達みたいに付き合つていきたかったと思つよ！」

「そうかな？・・・・・やっぱり俺はそう言ひ風には思えない。」

「わー……やつやつ意地はひて。『思えなこ』じゃないんで
しょ『認めたくなこ』そじやなこの?」

「もういいよーとこかく、優香の再婚の話は判つたから……」

「ホントはこのまま……一人つきになれるといんだらうな
ど……今日は優香と約束してるからなあ……せつかく智君に
脈ありつて解つたのに。つふふ。」

「ちょっと……脈とかないからー俺はエリカをそんな田では見てな
いからー。」

「むきになつちやつてまあ……いいわ。今日はやつまつ事にして
おこへあげる。」

「だから違つてー！」

「また今度連絡するから。ちゃんと返事聞かせてね。……あた
しは本気だから。・・ね！」

そう一方的にいつてエリカは saint · waveに向かつて歩い
て行つてしまつた。

「……ふー……なんなんだよーあー。」

エリカにいいよつて翻弄されてしまい、少々疲れた智雄だった。
しかも、エリカの言つとおり、もともと『まんざら』でもないのは
事実である。もとも今までそんな気持ちをおぐびにも出さなか

つたのだが・・・

亜希子との急接近で気持ちが傾いてなければ・・・どうなってい
たんだろう。

不覚にも想像してしまつ智雄だった。

本音（後書き）

『まんざり』でもない。『うつ気持ち』は男性だけなんでしょうか？筆者は男性なので・・・女性の心理は判りません。

流水（前書き）

やつとの思ひでついた亜希子の部屋。
二人の関係に進展はあるのか・・・

流水

赤坂にある畠希子のマンションへは、歩いてせいぜい10分程度。例によつてコンビニで雑誌をパラパラめくつて時間をつぶす。待たせているといつ意識は働くが頭の中を切り替えてからでないと、畠希子には逢えなかつた。

優香の再婚、そして思いもよらなかつたエリカからの『お誘い』とも取れる言葉。

いろんな事が渦巻いてまだ混乱していた。

メールの着信音が鳴る。

畠希子からだつた。

「まだお話し中だよね。起きて待つてるなんて言つたけど、気にし

なくていいからね、却って気を使わせそうだったから。やっぱりお風呂に入つて寝て待つてるから、何時になつても起こしてねーこれないならこれないで構わないからね。

亜希子

メールを見て気持ちが和んだ。すぐにかけ直す。

「あ、もしもし、『免ね待たせちゃつてー』もう終わったから。今からいっていい?」

形の良い乳房に右手を置いていた。その吸いつくような肌から手を放す事が出来ず、亜希子が柔らかな寝息を立て始めてからもずっとそのままだつた。でも・・・ふと『眠るときに胸に重みがあると悪夢を見る』と何かで読んだのを思い出し、名残惜しくも手を引いた智雄だつた。

正直、亜希子の部屋に入るまで、聰の店での事をなんと説明すればいいのか迷っていた。

しかし、意に介して亜希子は何も聞かなかつた。恐らくはなにか感ずるものがあつて、そつとしてくれているのかもしれないが、結果として、その大人の対応に智雄はほつとしていた。

まだすべてをさらけ出す程にはお互い（少なくとも智雄は）心を開いていないように思われた。

部屋に入つて、亜希子は

「よかつた、お風呂に入る前で、あたし夜は結構長風呂だから・・・待たせたかもしないもの」

そう言つてコーヒーを出してくれた。

そしてさつまき食べた料理の話、自分の仕事の話などをしてくれた。やはり予想通り、彼女はアパレルのスーパー・ヴァイザーをしていて、自社ブランドの店舗を回つて毎日忙しくしているようだつた。

「もうそう、それから智雄さん、あたしの事あんまり知らないでしょう?」

「そうだね、実は何にも知らないかも・・・で、智雄さんつて硬くない?」

「えへ・・・そつかな?なんて呼ばれたいの?今まではどうだった?」

「智くん……とか智って呼び捨てとか……いろいろ。亜希子さんは？」

「あたしも、色々かなあ……あ、智雄をさつて今いへつへ.

「32才。」

「あ、そつなのー?…じゃ智って呼び捨て決定。」

「え、なんで32だと呼び捨てなの?…とか、亜希子さんせへこくつなの」

「まあ!女性に年齢聞くなんて失礼よー.」

「えへ・・・失礼つて・・・」

「・・・ふふ、う・そ・・・・・引かないでねー.」

「・・・引くよつな年齢なの?」

「う・・・ん。じゃ自己紹介。改めまして、羽野亜希子36才です。子供はないけど一度結婚してました。」

「・・・まじで?…見えない、見えないよ36には!俺年下だとばつかり・・・」

「ありがとう。て訳だから、君は智。あたしは亜希子さんに決まり。

「

「うん。それはいいんだけど……」

「なに？ 神妙な顔しちゃって。」

「いや……なんか改まつて顔ののも今更なんだけど……」

「わへ、だから? な・に・?」

「……俺達つていうか、亜希子さん。その、真剣にお付き合つてが始まつたつて思つていいのかな？」ないだは酔つた勢いみたいな部分もあつたし、まだなにもそういう話してなかつたし

「あたしは……もちろんいいわよ。智雄さん。じゃなくて智は？」「んなおばさんでいいの？」

「せいや、文句は一切ありません。末永くようじくお願ひします。」

「改まりすきよ！ ……ええ、ふつつか者ですが、こいつはようしくお願ひします」

亜希子はこきなつ三つ指ついて頭を下げた。

「え、え、いや……その」かうかう……」

その場で土下座をする智雄。

「わへ……なにやつてんのよ。『一ノ瀬一也』と飲んでじやつて、お風呂に入る前に片付けたいから。」

「あ、じゃ、じゃあもう帰らうか？」

「え～・・・これだけ待たせたのに?何にもしないで帰っちゃうんだ。ふうん・・・」

「泊まつてもいいの?」

「だつて、もう彼氏なんでしょう?あたしの。じゃあ泊まつてってほしいかな。」

そう言って悪戯っぽく笑う亜希子に智雄は欲情した。黙つていきなり抱き締め、唇を重ねる。

「ひうん・・・せつかちなんだね・・・先にお風呂に入らない?」

抱きしめられた腕をすり抜けて亜希子は訴えるが・・・また抱きすぐめられ・・・

「入らない!・・・実はもう我慢できそつこない。」

「・・・そつなんだ。あたしは一度目だけど・・・誰かさんは初めてみたいなものだしね。ふふふ」

顔を真赤にしながらも挑発する亜希子を力強く抱きあげてそのままベッドに運ぶ。

ベッド脇の時計をみると、もう3時を回っていた。

もう一度、亜希子の美しい寝顔を見て
女性のぬくもりを久し振りに感じながら・・・智雄は眠りについた。

流水（後書き）

サブタイトルは、今回の話の流れから、意外性が全然なかつたので、
流れる水・・・と。

螺旋（前書き）

亜希子とやつと付き合う事になつた智雄。久し振りに愛しい人のぬくもりでぐっすり眠れるもの・・・

畠希子の部屋で迎える一渡田の朝。

智雄が田を覚ますと、畠希子が覗きこんでいた。

「おはよ。早いわね……まだ6時だよ。」

「……おはよ。いつから起きてたの？」

「つこれいか。あんまり可愛い顔で眠ってるかい、見てた。うふふ。」

「

その笑顔に癒されつつも、半身で起き上がり氣味の畠希子の胸元は
刺激が強すぎたようで…。
男としての朝の生理現象も手伝い…またもや畠希子を抱きよ
せてしまつ。

「ちゅうとー?…昨日、2回したよね?たしか…」

「やうだりか?…もう一回だか!」

「これから毎日ひなのー?」

「毎日?…うに越しむこつて事?」

「そういう意味じゃなくて…泊まつに来る度じんなど激しこ
のかつて事!」

「え?…・・・気が進まないなら…・・・」「うーーー!」

「だれがそんな事いった？ただそれなら泊まりこくる時の用意があるって事…もう一つ…こんなにして…。」

いきなり智雄自身を驚掴みにして上手にしゃつあづながり畠希子は言ひ。

「あ、う、うん……わかった。……あつ。」

そして畠希子は智雄から視線を外さずそのままやつくりと下腹部に顔を寄せていった。

「はうっ・・・」

生暖かいものに包みこまれて……智雄の下腹部はたちまち硬く充血を増していく。

会社に出でこぐと、もうすでにアポイントの係は総出で電話を受付

ていた。

(やつぱ、しばらへ)「なんだろ? なあ・・・」

智雄もデスクに腰掛けすぐに電話受けを始める。30分程経過して、営業まで全員が出勤してきた頃、支店長が声をかける。

「えへ・・・全員そろつたようなので、営業の諸君は今受けている電話が終わり次第、会議室に入つてくれ。」

みんながみんな顔を見合させた。

(いつたい何だ? まだなにかかるのか?)

そんな不安がそれぞれの顔に出ている。いつたいなにがあるというのか・・・

さうして15分程経過して、やつと全員が揃つた。難しい顔をしている支店長が、やつと真一文字の口を開いた。

「えへ・・・先日からの件で本社も蜂の巣をつづいたような騒ぎになっています。そこで全員に本社から通達があります。昨夜、本社にて経営陣による会議が行われました。そこで出た会社としての結論です。近々に弊社は事実上の『倒産』を致します。そこで、現存の在庫整理、そしてアフターサービスなどをする者を除いて、つまり営業職のみなさんには退職して頂く事になりました。」

一瞬全員が色めきだり、ざわめきが起き始めた。その時。

「質問があります!」

「ハイ、野口君」

「ずいぶんと簡単に終わっちゃいますが、いつ付けでのお話をどうぞ
か？それから退職金、雇用保険など、最低限の保障はどうなってる
んですか？」

「本社サイドの意向をそのままお伝えします。来月末付けです。保
障に関しては、事務からの通達が届かなければ具体的な返事は出来
ませんが、もちろん、有給も消化して頂きますので、実際には各自、
もう少し早く身体は空くと思いますが。当たり前の査定よりも多少
色がつく事はお約束します。他には？」

智雄はとりあえず質問する事にした。

「ハイ」

「はー、片山くん。」

「他の会社への紹介などは……していただけないんでしょうか
？」

「……今のところはお返事しかねます。それも併せて本社に聞
いてみましょ。他には？」

…………

何とか定時まで会社で過ごし、帰宅した智雄だが……
なにもやる気が起きない。転職するつもりではいたが、まだなにも
活動していなかつた。

ハローワークにいこうにも、平日休みを取らねばならず……そ
れなら、ギリギリまで過ごして有給をまとめて貯つたほうがいいの
か……

まったく考えがまとまらなかつた。

(ま、いいか!…とりあえず一月あるし、何とかなる…)

亜希子に連絡しようとかとも思つたが、一日間泊まつてゐるし、このままする同棲してしまうとこいつ事態は避けたい。亜希子にそういふ甘えはしたくなかった。

休憩なのだろう。六時半頃亜希子よりメールが来た。

『今日は? 来るの? . . . (催促じゃないからね!) 来ないんだつたひ、業者のお付き合ひがあるからそつち優先するけど。 亜希子』

いつもいつも亜希子のメールにはべつとへる。まったく嫌味がなくこあらを立てるような文章には感動する覚える。

『了解! 今日はおとなしく家で寝ます。 (笑) 』

『うん、判りました。それから明後日お休みです。明日は来てください。待ってるから。 亜希子』

『はー! 判りました。楽しみにします。』

やはり亜希子はすごい。少しメールしただけで気持ちが癒される。不安な気持ちもどこかへ飛んで行つてしまつた。(今日は聴のとこに顔出しに行くか!)

亜希子の事もすーっと隠しておけるものでもないし、話の流れ次第では、今日その事も話せるかもしない・・・・このままでは一人

して saint・waveに行き辛くなってしまった。

20：00過ぎに店に入ると、週末でもないのにかなり忙しかった。不定期のバイトの女の子が入っているところから察するに・・・予約が入っていたのかも知れない。

「お疲れ！出直そうか？今日忙しそうだし・・・」

「気をつかうなよーそのうち落ち着くだりつい、カウンターで待つててくれ」

「ああ、判った。」

しかし、一向に客足は減らず・・・少し落ち着いた頃にカウンターごとに

「仕事はどうなったんだ？あれからおつづいたのか？」

と、聞かれて

「ああ、実は、専業全員首切りになつたよ。いまから職探しだ。」

「そりやたいへんだなあ・・・」

と喋つただけで、22：00頃になつて、智雄はあきらめて帰る事にした。

「悪いな、なんか待たせてしまつて・・・」

「いいよいによーあんまり暇でつぶれてしまつたら、寄る処がなくなるからなー（笑）」

「お前、縁起でもない事言つなよー。」

「「「ぬんぬん・・・じゃまた」

「ぬーーあつがどつ。」

部屋に戻る前に映画でも見ようかと、ビデオを借りにレンタルショップに入った。

少し酔いが回ってる事もあり、ああでもないこいつでもないと一時間程つらつら適当に話題作を3本借りた。

ゆづくと家路に向かってる途中で携帯が鳴る。

着信はエリカからだった。少し警戒しながら電話をとる。

「あ、よかつた、まだ起きてた?」

「ああ、どうした?」

「もう寝るといひだつた?」

「こーや、こまびとオ屋からかえると」

「ならちよひよかつたー智君、今から会えない?」

「え?、今日?今から?」

「うん、実はもうマンションの傍まで来てるんだ!今からだと・・・ロイヤルで待ってるから、出てきて。」

エリカが一人で智雄に用事がある事など今までなかつた。昨日の今日だ、おそらくは断つたほうがいい予感はある・・・が、酒入つてる為か智雄はついついい返事をしてしまつ。

「判つた。一回帰つて借りたビデオおいてくるから・・・20分くらいでいく。」

螺旋（後書き）

エリカはいつたい何故こんな時間に会いたいのか？
安直な流れにはならない筈です。

予兆（前書き）

酔つた勢いでエリカからの呼び出しに応じてしまった智雄。いつた
い何の用なのか？それとも昨夜の『お誘い』の続きなのか・・・

予兆

一旦部屋に戻り、智雄はエリカと約束している薬院のロイヤルに向かつた。

歩いて5分もあればつく道のりを、酔いが覚めて『後悔』に苛まれながら歩いていく。

（なんで行くなんて、返事したんだろう……俺、うまくかわす自信なんてないのに）

昨夜のエリカの行動は、まったく予想していなかつた。今までそんなそぶりも見せなかつたのに……などと、済んでしまつた事への反省。

そして、自分の心の隙とか美人に反応してしまつ悪い癖が、まだ治つてなかつたのか？さらに落ち込みながら目的地につくまで考えていた。

階段を登りきり、入口から中を覗くも、そこから見える禁煙席にエリカがいる筈もなく・・・

『いらっしゃいませーお一人様ですか？』

とおぞらしく社員であるひびきの高い女性スタッフに声をかけられ、

「いや待ち合わせ

と喫煙席の方向を指差しエスコートを振りきり歩いていった。

「あら、早かつたわね。」

「お待たせ」

「そんなに待つてなによ、コーヒー頼んだけど・・・何か食べる?」

「・・・じゃあ・・・スマッシューンー!」

『お決まりですか?』

「このデイモズ・パンケーキのセット。コーヒーで」

『かしこまりました。パンケーキのセットをホットコーヒーですね。お飲物は先にお持ちしますか?』

「はい、この人のと一緒に」

エリカをちらつと見る。

『かしこまりました。』

お決まりの接客を受けてから、智雄は切り出す。

「で、なんの用事？」

「あら、ずいぶんせつかちなのね。せっかく一人つきりなんだから・
・もう少し会話を楽しもうよー！」

「・・・いや、別に急いで帰る予定じゃがないんだけど、気になる
じゃない。」

やがて先ほどのウエイトレスがコーヒーを運んできた。

『お待たせしました。』

二人ほとんど同時にコーヒーに口をつけたところで、

「じゃあ、『J』要望の本題にはいるわね。」

「ああ、やうしてもうひとつ助かる。」

「ね、智君、うちの会社にこない？」

「ええつ？ ハリカつて医療器具メーカーだったよね・・・で、俺が
会社辞めさせられるの知ってるの？ ・・・あつ、聴？」

「うん、そう。さつきようじ智君と入れ替わりで saint · w

a veにいったのね、それで智君の会社が大変だつて、聰から聞いて・・・だつてね、うちの会社ちょうど営業を募集してるのよ！」

「いやあ・・・俺元々営業畠つて訳じやないし、医療器具なんて全然判らないよ。面接で落ちるのが関の山じやない？」

「なに言つてるの？あたし、一応管理職だよー人事にも顔利くし、受けるだけ受けでみなよ。」

あまり気のりしない話ではある・・・ではあるが、エリカがせつかく言つてくれてる話を無碍にもできないし、もし受かれば、今務めている会社よりはよっぽどネームバリューもある。
もしかしたらサラリーだつて跳ね上がるかもしれない・・・

「なあ、エリカ。その話考えさせてもらつても・・・」

「もちろんよ、一応人事について枠は取つて貰つとくから。でも・・・
・金曜日には返事聞かせてね。」

「ああ、悪いな。」

なんだか変に警戒してきた自分が馬鹿みたいに思えた。こんなに心配してくれていたエリカに申し訳ない・・・そう反省した。

ホットした途端、腹が減つてゐる事を自覚する。そこへまたあのウ

エイトレスがお待ちかねの皿を持ってやってきた。

やつときたパンケーキを美味しそうに頬張る智雄を、エリカは二口。「」と見つめていた。

「まだそんな甘いもの好きなんだ。」

「悪い？」

「ううん。よくうちに遊びに来る時もケーキとか買ってきてたなあ
って思いだしただけ。」

「そうだったっけ・・・」

「そうだよ！聰は甘いもの全然ダメだから、あたしと洋介（二人の
子供）と智君で全部食べたじゃない。」

まだ平穀だった頃の聰とエリカは、本当にいい夫婦だった。自分達
とは違うと智雄は思っていたのだが・・・夫婦仲とは外からみても
わからないものだ。智雄と優香が離婚してから一年足らずで聰とエ
リカも離婚してしまった。智雄は自分の拠り所が無くなってしまった
たようで辛かったのをよく覚えている。

「……で、もつ一つの話は？」

「もつ一つの何だよ？」

「えへ……忘れてる……」

「だから何……って、……えへつ……あれ？あの話？」

（うわあ～……来たよ……せつぱり。本氣だったんだ、エリカ。）

「あの話以外に何の話があるのよー！」

「あれって……本氣？」

「あたりまえでしょー！」

「いやだから……何でおれなんだよー！エリカだったらそれこそ選りどりみどりだろ？」

「あたしは、智君がいこつこつてるのこーもつ、はぐらかさないでー智君、あたしの事きらこじやないわよねー。」

「そりゃ嫌いなわけないじゃない。何年も前から知ってるし……」

「そういう事は聞いてないのー！女としてどうなの？タイプじゃないの？抱きたいって思わないの？」

「答えないとダメなの？その質問。」

「ええ！納得できないと帰らない。」

「ちょっと勘弁してよ・・・・ぶっちゃけてエリカはいい女だよ。それもどぎきりの。だから俺から見たつて抱きたくない訳はないしだだね・・・やつぱり駄目だよ。俺、聰や優香が気になるもん。」

「もひ、いいわ。ついて来て」

そういうなり黙つてレジまでスタスター歩いて行き、一人分の勘定を済ましてくる。

「いいよ、俺が出すから。」

「じゃあ、次を出して。」

「次つて・・・どうか飲みに行くの？」

「いいからー黙つてついてくるー。」

階段を下ると、

「おつかれさー」

エリカは駐車場のほうに歩いていく。赤のボルボが止まっていた。

「おーおい、飲みに行くのに車でいくつもり……」

「もう、男がぐちぐち言わないのー。」

これ以上刺激すると恐そつたので、智雄は黙つてボルボの助手席に乘つた。元々聰の愛車である。（離婚の時にエリカに取られたつて言つてたよな・・・懐かしいなあ）

などと感傷に浸つていると・・・車は長浜のほうにドンドン入つていく。

「なあ・・・もしかして・・・ラーメン・・・」

エリカは返事どころかこちらを見よつともしない・・・完全に不機嫌のようだ。

しばりくすると

「着いたわ。降りて。」

そう言われて着いた場所は・・・・・

『チャペル・ココナツツ』と看板に大きく書かれており・・・・入
つた事はないがここは！？

「ラブホ！？？」

予兆（後書き）

いきなり！？

ラブホって事は・・・。やつぱりありますよな。
や二冊はダメですかね。

皆様のお陰ですありがとうございます。 祝！「ユウサク物語」1万ユニークアクセス！！

棘（前書き）

エリカに連れてこられた場所はラブホテル！
少々強引なやり方に若干引きつも・・・美女の誘いを断るのは至
難の業・・・

棘

着いた場所はラブホテル。

(「つやましい」ここまで強引だとは思わなかつた。)

みればエリカは智雄の事など忘れてるかのように一人でロビーに向かつてカツカツ歩いていく。

「おい・・・・おいおい！ エリカ、待てよ！」

仕方なく後を小走りに追いかけるが・・・・・エリカの歩く速度の速い事！！

エントランスは南国をイメージしたつくりでロビーまではくねくね階段をのぼったり橋を渡つたりと、入口をしらない智雄は迷いそうになりながらもたもたとエリカを追いかける。結局追いついた時には受付ロビーの中だった。

「まひつて・・・なあ、まず話しあひ。そんなに急いでどう・・・・・」

”カチャリッ”・・・・エリカはすでに部屋へのカードキーを手にしていた。

「だからーなんでそんなに急いでいるする必要があるんだ？！」

「部屋まで一緒にきてくれたら教えてあげる。・・・・・どうある

? 一人で歩いて帰る?』

すぐに『帰る!』と突っぱねるべきなのは判っている。しかしエリカの行動が常軌を逸しているようにも思える智雄は、このまま置いて帰る訳にもいかず。なんといって説得するか一生懸命考えていた。

”チーン”

なんと気がつけばエリカはエレベーターに乗っている。

「後は智君次第。部屋はSの401だから。覚悟が決まつたら来て。
・・・待ってる。」

「エリカ!」

”チーン”

(行っちゃったよ・・・どうするかな。)

結局……智雄はS-401と書かれた部屋の前にいた。ルームサービス用であらうつブザーを鳴らして待つ。

「ゆっくりとドアが開く。智雄は中に入った。かなり広い部屋のようだ。

エリカが振り向き、熱っぽい視線をかけてくる。

「さあ、どうこうもりか聞かせてもら……」

エリカはワンピースの背中のジッパーを下げてスルスルっと脱ぎ始める。目の前にはかなり色っぽいブラ、ショーツ、ガーターベルトに包まれた一人の妖艶な美女が立っていた。

「…………」

何も言えず智雄は数秒間凝視していた。

「な、なんで？」

「我に帰つた智雄は慌てて目を逸らし、話合おうとする。…………が

エリカは智雄に抱きつき下着だけの身体を押しつけてくる。

「なんにも言わないで！抱いて……、お願い。」

「そんなの無理だつて！」

しかし、言葉とは裏腹に肩を掴んで引き離すつもりの智雄の両手はしつかりとエリカを抱き締めてしまつ。

艶めかしく下から見上げるよつよ智雄を見つめて……。

「あたしつて魅力ない？智君にとつて……今この場だけでもいいの！あたしの事、愛して。」

そう言つてエリカは吸いつくよつに智雄の唇をむさぼり始める。

ほんの5秒前まで智雄の頭の中には亜希子の事があり、目の前のとびつきり上等な誘惑と必死で戦つっていた。……が、それもここまでだつた。

正直に言つてしまつと・・・ヒリカは最高だつた。シャワーも浴びずにつたつぱり2時間は愛し合つた。特に、一度果ててしまつた智雄を手と口だけで休憩なしで2度目のセックスに導いたあたりは凄すぎて声も出なかつた。テクニツクがズバ抜けてるとか、そんな事ではない。

目線や唇の動きだけで相手の男をその氣にさせてしまつ。まるで魔性だと思つ。

そして・・・これだけは避けないといけなかつた事を、智雄は避ける事が出来なかつた。

二度ともエリカはコンドームの着用を拒否し、そして智雄がいよいよ果てる。というタイミングになると、長い両足を智雄に巻きつけて逃がさなかつた。

「大丈夫だからー中でー中で逝つてーー」

快樂に負けてしまつたのである。

二度目が終わった後、吸いだしたばかりの煙草を智雄から奪い取り、一口だけ吸つて細く長く煙を吐気出したエリカ

「先にシャワーしてくるね、智君」

情事が交わされた安心感からか、ここに来た時のようなきつい表情はみじんもなく、まるで『聖母』のような柔らかい笑顔を魅せて、エリカは白い裸体に何もまとわずに浴室に消えていった。

一人になって智雄は初めて後悔した。

聰や優香の顔がちらついたが・・・そんな事よりも亜希子を裏切ってしまった自分を呪つた。

交代でシャワーを浴びた後、智雄はエリカに向かつて謝った。

「「めん・・・エリカ。俺こんな事になつてから言うのは卑怯なん
だけど・・・今彼女がいるんだ。だから・・・今日の事は・・・こ
れきりじやあ・・・ダメかな。」

しばらく沈黙していたエリカだが・・・

「・・・へ・・・そうだったんだ。じゃあしうがないよね・・・

」

何でもないよ!-という顔をしているエリカだが、一瞬だけした複雑
な表情を・・・

智雄は見逃した。

「よかつたあ〜・・・解つてくれて。その人に出逢つてなかつたら・
・・多分エリカの事・・・

「いいわよ!-そんな気を使わなくて。」

「本当だつて、実際、俺エリカに昔つから魅力感じてたし。」

「そりなんだ……ありがとう。じゃあお願ひがあるんだけど……」

「

「なに? 改まって……俺に出来る事だつたら」

「そんな困らせるような事じゃないから、心配しないで。」

「うん……で、何をすればいいの?」

「今夜だけ! 今夜だけでいいから、あたしを恋人にして! 朝まででいいから。」

まるで判決を待つ死刑囚のように、智雄の一拳手一投足をじつと見つめるエリカは……とても綺麗だった。

「……判つた。じゃあ泊まつていこうか?」

ぱあっと花が咲いたように笑顔になるエリカ。少し涙ぐんでいるようにも見える。

「ありがとう。嬉しい!」

そういうて智雄に抱きつき、口、胸、肩、とキスの雨を降らせ始める。

「ちよ、ちよとエリカ、」

と、身体をずらして避けようとする智雄は自分が男として反応してしまっている事をエリカに握りしめられて自覚した。

翌朝、エリカはいつも通りに振舞ってくれていた。

二人でモーニングサービスで朝食をとり、交代でシャワーを浴びた後、

「最後にやさしーいキスして！」

とねだられて、その通りにギュッと抱きしめてゅうくじとフレンチキス。

「ああ、じゃ、マンションまで送っていくわね。」

満足したように一度ほほ笑むだ後、あつさつとソラヒとソラヒといつものサバサバしたエリカに戻ったようだった。

連日の情事に若干の疲れを感じつつも、その日も仕事を無難にこなしてから家路についた。

昨夜のビデオを見ながら、部屋で「コーネーとジヤンクワード」でまたり過ぎます。

前日と同じくらいの時間に畠希子よりメールがあった。

『 こんばんはー何時頃いったらいー?』

『 もうろんー何時頃といったらいー?』

『 今日は・・・買ご物してから帰るから、21:00くらいがいいな。』飯我慢できる?』

べつから手料理を振舞ってくれるようだ。

智雄は罪悪感に押しつぶされそうになつたが、メールだけで済んでほつとしていた。

約束の時間になり、亜希子の部屋に行くと、もう食事の用意が出来上がつっていた。

鴨とクレソンを使った鍋だそつで・・・映画の『失乐园』で有名だとか何とか・・・

「泊まつていけるんでしょ、ひ~？」

そういながら缶ビールを持つてくれる。

「もちろんーーそのつもつだナゾ、亜希子さんほんまにこの？」

「なに遠慮してるの、あたしは皆の彼女なんでしょう？」

「うふ。 ううだよーーこれが来たい時に来て！・・・これ、あげるから。」

「さうだよーーこれからは来たい時に来て！・・・これ、あげるから。」

亜希子からドナルドのキー ホルダーにぶら下がつた鍵を手渡された。

「・・・これって・・・合鍵だよね。ありがとうございますー・嬉しいよ。」

「下のセキュリティもこれ一本で密かにいらねー。」

「うん解った。」

一人して美味しい飯を食べた後、亜希子が入れてくれたコーヒーを飲んでしばらくテレビを見てゆったり過ごす。

「お風呂に入つて、着替えたら?」

と亜希子が男物のパジャマを渡す。

「えつ?これ・・・誰の?」

「もちろん智のよー人が使つた物出すわけないでしょーー今日買つてきたの。」

(なにから今まで至れり勿れり・・・本当にこの女と出逢えてよかつた。)

「じゃあ、そつしちづつかな。」

そして、風呂に入った。

「下着の替えも置いとくね!」

ドア越しに亜希子の声。

あつたまつたといひで下だけ（パンツとパジャマ）着て、畠希子のところに戻った。

洗い物をしてこゝ畠希子を後ろから抱き締める。

「畠希子さんも早く入ってきてー。」

首元にキスしながらそういうと畠希子は向きなおして智雄の顔を見た。そして智雄の身体を見て・・・

「うふ、そうする。先に寝てて。」

そういうとスルッと智雄をすり抜けていった。そして浴室のドアの音が”バタンッ”

(あれ?どうしたんだろう。)

何となく暗になり、脱衣所までいった。なんと、脱衣所どころか浴室まで真っ暗で風呂に入っている!暗かったので消えていた灯りをつけながら声をかける。

「ねえ、どうしたの?こんなに真っ暗にして。」

「どうもしてない。・・・先に寝ててついていたでしょー。」

それきり黙ってしまった。どうも様子がおかしい。仕方なく脱衣場を後にしおつと振り返った洗面の鏡を見て凍りついた。

「な！、なんで？！－！－！」

智雄の両肩から胸にかけて・・・・一か所づつ、併せて四か所の痣
がみえた。
だれがどうみても左右対称のそれは・・・・・『キスマーカ
だつた。

棘（後書き）

タイトルの棘ですが……もちろんエリカという美しいバラの棘の事です。

そんな事より……かなりまずい状況かもしませんね。

金曲（前書き）

エリカなのか？

胸に残された痣の為に田中希子に知られてしまった！

どうすれば切り抜けられるのか？

「…………」「ひびいてるよ

真っ暗な浴室から畠希子の震える声がする。ビリヤード台にてこるようだ。

質問の意味は十分す、あるいは程度解つていたが、智雄は何も答える事が出来ないでいた。

「なんだ？、どうして向にも戻つてくれないの。あたしが勝手に勘違いしてるだけ？」

「…………」

「卑怯者……何にも答えないなら……出てつけて……」

「…………まつて。畠希子さんが風呂からあがつたらキチんと話すから……」

「解つた。じゃあ、コビングに戻つて……

「ああ。」「

正直、下手な嘘で逃げられる雰囲気ではなかつた。ここまでにはつきりとした証拠がなければ、なんとか取り繕つて、認めないとつもりだつたが……

それにもしても、なぜ？こんなものが・・・どう考へてもヒリカの仕業に間違いなさそうだ。

でも・・・解ってくれたんじゃなかつたのか？智雄は考えてみたものの・・・エリカが何を思つてこんな事をしたのか皆田見当もつかなかつた。智雄はもう一度痣^{キスマーク}を確認してから、Tシャツとパジャマの上着を羽織つた。

30分程して亜希子が出てきた。バスローブ姿で髪の毛にタオルを巻いている。

今現在、智雄が置かれてる立場が違つたら・・・迷わず抱きしめてしまいたい程魅力的な姿なのだが・・・田を見つ赤に染めた亜希子は智雄に向かっていつもの笑顔はもちろん向けてはくれなかつた。

「いや・・・で、キチンと話すつて、何を？あたしが勘違いしてるつて事？」

「いやあ、聞きたくない！なんで？まだ付き合つて何日もたつてないんだよ？それともあたし、騙されたの？」

「違う！許して貰えるとは思つてないけど、俺は本当に亜希子さんに出逢えて良かつたと思ってるし、まだ短期間だけど、将来の事まで考へてる。今一番大切な人だと思つてゐる。それは信じてほしい。」

「じゃあ、尚更なんでこんな事になつてゐるの?智が言つてゐる事つて
わざと矛盾してゐる!」

「とにかく、最後まで話を聞いて欲しい。」

「解つた・・・それで?何を話したいの。ちゃんと聞くから。最初
つから、嘘なしでね。」

幾分覚悟が決まつた亜希子は落ち着いて話を聞く気になつたようだ。

「それで?そのHコカさんとはどうしたい訳?智は二股かけよつと
してたの?」

「違う。だから、事後承諾みたいにはなつたけど、実は彼女ができ
たばかりだからこれつきりにして欲しいって・・・それで解つてくれ
たと思つたんだ・・・」

「ふーん・・・智つて・・・鈍いとは思つてたけど・・・それで納得

できる女がいる訳ないじゃないー本気にしたの?」

「うーん・・・でも元々友達の奥さんだつた子だし、昔から知つてたから。」

「・・・で、判つてくれた筈のその人がどうしてあたしに挑戦状叩きつけてる訳?」

「挑戦状?」

「その胸のキスマーク!!」

「・・・あつ・・・」

「『『・・・あつ・・・』つて、まさか・・・うつかり付けやつた。とか思つてた訳ないよね?」

「・・・ひ、うん・・・実はそつかな・・・と」

「そんな訳ないじゃない。もうー・・・じるつとだまされちゃつてー..どうせ『今田だけ』とか何とか甘えられて一緒に寝たんでしょ!」

智雄は自分の顔色が変わつていいくのが解つた。

「やつぱりーーとにかく、その人ともつ一度会つて話をつけて来なさいーそれまではこの家は出入り禁止

「えー・・・」

「当たり前ー・・・今日も帰つてほしことひるだけど・・・湯ざ

めして風邪でも引いたら困るから、泊めたげる。・・・で、も、何
もしないわよ！」

「解った。明日にでも会って話してみるよ。」

亜希子のベッドは狭く、抱きあわずに一人入るのはかなり辛かった
が・・・智雄は指一本触れずにまんじりとも出来ずに朝を迎えた。
(眠れなかつたのは亜希子も同じだつたが。)

次の朝もあまり話をするでもなく朝食を一人で食べて、智雄の出勤
時間になつた。

「じゃあ行つてくるよ。」

「ええ・・・・・いつてらっしゃい。とにかくいい加減な事したり
嘘ついたりしないでね。たとえ向こうと付き合ひ事になつたって話
でも・・・・ちゃんと報告して。」

「それはない。おれの気持ちは決まつてゐるから。」

あつぱつと腰こすり切つたが、畠希子の反應はアリテアリでアリタ。

「決まつてゐるのういうことになつてゐるんだからねー判つてゐるから。」

「うへ・・・ああ、深く反省している。とにかく待つて。帰つてくるから。」

そして畠希子は向も言はずドアを閉めたが・・・すぐドアは開いた。

ビーッたんだけひへ、智雄が中を覗きこむと

「忘れ物。」

そつと畠希子は口をついた。

「・・・・・

ありがといへ。」

なぜか智雄はやう答えた。

「馬鹿ー早く行きなやつーー。」

”バタン” もつ一度ドアが閉まる。

ある程度の自信はあったが、やはり亜希子は智雄を信用してくれた。しかも許そうとまで思ってくれているようだ。

そう考えると、ますます自分の軽薄な行動が悔やまれる。

自宅に着替えに帰る途中に何度かエリカにメールしたり、電話をかけたりしたが一向に繋がらない・・・

とにかく会社には出かけた。

普通なら仕事が手につかないところなのだろうが・・・今回は何かしていないとおかしくなりそうだつた。自己嫌悪と猜疑心に苛まれながら・・・智雄は必至で「えられた仕事をこなしていった。

別に定時にこだわる訳ではなかつたが、事務の一人が欠勤しており、電話番の当番が不在だった事により、営業職の中から智雄が当番に選ばれた。（予定がないのが一人だった。）

コーヒーをがぶ飲みしてひたすらかかつてくる電話を受ける。社を出たのは20：00過ぎになつてからだつた。

コンビニによつてしまらく雑誌の立ち読み、そしてビールとつまみ、弁当など見つくるに買って帰る。

玄関のドアを開けてすぐに違和感に気がつく。

心なしか、片付いているように見える。

・・・・・・・・・・

智雄はすぐに部屋に上がりて灯りをつけた。

「なんだ？・・・・・これ？」

誰もいないキツチンまでもが綺麗に片付けられており

カウンターには、一人分の食事が用意されてあつた。

歪曲（後書き）

すべて皆知ったからと言つて、元にもどる説では決してない。
ましてや、これから起きる試練に一人は耐える事が出来るのだろうか？

確信（前書き）

自宅に戻った智雄を待っていたのは・・・
無人の部屋に残された二人分の食事。いつたいだれが？

「・・・なんだよ・・これ。」

まだ温かいそれは・・・

さも今から一人で食べる為に作ったばかりのディナーとも呼ぶべき物で、ワインまで注いであつた。食材を見る限り、冷蔵庫のあり合わせではありえない。智雄は料理が得意な方ではあるが、イタリアンパセリ、クレソン、フレッシュユバジルなんて香草は買い置きしないし、だいたいそんな食材を使う料理なんて、わざわざ自分一人の為に作る訳もない・・・

前菜、パスタ、肉料理、サラダ。すべて一人分。メインの肉など湯気すら上っている。

いつたい誰が、そして何のために先ほどまであらう時間まで自分の部屋で料理を作っていたのか？しかも鍵は閉まっていた。

・・・という事は？この部屋の合鍵を持っている人間がいて、今日は智雄の為に、一緒に飯を食おうと、料理しにきたが、智雄が帰つてくる直前になんらかの理由で料理をそのままに慌てて帰つた。・・・と。

(あらえない。亜希子にすら、まだ合鍵を渡していない)といつのこと。
・・)

恐る恐る、玄関に置いてあつた使い捨て傘を両手に握りしめて、ト
イレ、風呂場、ベランダ、果てはクローゼットまで確認してから、
智雄は改めて玄関の戸じまり《チーンまで》の確認をしてソファ
ーに腰を下ろした。

気持ち悪い。といつより恐ることで、智雄は結局全部処分した。食
べても大丈夫な保障などどこにもないのだ。

亜希子に電話しようかとも思ったが、無用な心配をかけるのも好ま
しくはない。

結局それをせずに風呂に入った。

風呂で温まりながら冷静になりつつある頭で考えてみて……それでも警察を呼ぶ!…という選択を何故しなかつたのか……自問自答を繰り返した。

答はいたってシンプルである。まず、金田の物に手をつけた形跡がない事。その上で、智雄はこの事態について、多少たりとも日星がついたからだ。あくまでも仮定ではあるが……

鍵をどうやって開けたかは本人に聞いてみないと解らないが……今、智雄のまわりでこんな訳のわからない事をしそうな可能性があるのは一人だけ。

そう、エリカではないか?…という結論にしか結び付かない。

風呂からあがり、エリカに連絡してみるが……やはり繫がらない。いつたいどうなつているんだろう……

突然携帯が鳴る。

確認せずに通話ボタンを押してしまつ。

「あら、はやいねえ……」

「母さん？！」

「あんた帰つてこないから・・・掃除しといたよ。いくら男一人でも、もう少し綺麗に・・・」

「・・・ああ、母さんだつたんだ・・・いつたい誰だれつてびつくつしたよ。」

「なんの事はない・・・母なり合ひ鍵を持っている。ホットした智雄である。」

「それにしても来るなら来るつて電話しろよー。それももう年なんだから！こんな夜に帰るんなら待つてればよかったのに・・・」

「なに言つてるんだい、あたしは夕方ついて、掃除して暗くなる前

「すぐ帰つたよ。」

「夕方？・・・すぐつて・・・じゃあ」の食事の準備は？」

「訳分からぬ事いうねえ・・・料理なんにてしてませんよ。」

「そ、そつか・・・あつ、『めん』かあさん、ちょっと用事思
い出したから、またかけるわー! それと、掃除ありがとう。」

「はいはい。」

やはり・・・エリカなのだらつか・・・

また、携帯が鳴る。・・・亜希子だ。

「もしもし、どうしたの？」

「あのね・・・・・あんな事いったのに、いい辛いんだけど・・・」

「なにかあったの？！」

「ううに今からこれない？」

「なにか、あつたんだね！」

「そんな・・・大した事でもないんだけど・・・」

「すぐに行くからー待つてて。」

20分程で亜希子のマンションについた。前日渡された合い鍵が以外にも役にたつた。

「なにがあつたの？」

「これ・・・みて」

亜希子に携帯を手渡される。

メール画面。内容を読んで……ぞうとした。

『あなたに片山智雄は似合わない。はやくどうかに消えなさい』

『いい年をして、年下の男を追いかけまわすなんて滑稽!』

泥棒！泥棒！泥棒！泥棒！泥棒！ · · · · ·

死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね

黒墨雑言が延々とつづられている。日付を見ると、全て今日送信されたもの。アドレスは見憶えがないものである。

「メールはこれだけなんだけど・・・」

亜希子は携帯を手に取り画面を切り替えた。

着信記録である。

非通知で100回以上着信されている。

「これって・・・・やつぱり、エリカさんて人なのかなあ・・・
智、他に心当たるある?」

「・・・・ない。寝てる間に携帯覗かれたのかもしれない。」

「アドレスは変えればいいんだけど・・・」

「「あんーおれのせいで、まさかこんな迷惑かけるなんて・・・」

「うん、その事はいいの。それより・・・エリカさんに会えたの

?」

「いや、連絡がぜんぜんつかないんだ。」

「はやく話しあつたほうがいいと思つ。かなり危ない精神状態にな

つてゐるんじゃないかなあ。」

「今から血まで様子をみにいってみたと想つんだが……大丈夫?」

「あたしは大丈夫だよ、いい? いい加減な気持ちで接したらダメだよ。でも突き放さないであげて!」

「本当にじめん。じゃあ行つてくるけど……」じまりだけはちやんとして一チーンもかけておいで!」

「……うふ。解つた。……もし、やつぱり……」

「うふ? なに?」

「いい……つてらつしゃい。」

「…………あのむ、今晚中に解決できるかどうかは判らないけど……話がついたら、ここに帰つてきてもいい?、とこつよろ一緒に住みたいんだけど……どうかな?」

その時たしかに畠希子は笑顔になつたが……

「考えとくー。」

とだけ返事を返した。

智雄はその足で、エリカの自宅に向かつた。

確信（後書き）

犯人はやはりエリカなのだろうか？
亜希子に脅迫めいたメールや着信を残したのは？

疑心（前書き）

いつたい誰がこんな事？

エリカを探しまわる智雄は真相を見つける事が出来るのだろうか？

疑心

智雄は亜希子の部屋から出て、すぐヒリカの住むマンションに向かつた。智雄の住む薬院から西鉄で一駅の平尾にあるマンションまで、タクシーで向かつ。

玄関エンタランスでセキュリティー越しにブザーを押すが返事はない。

しまりく繰り返すも埒が明かず、氣は進まなかつたが・・・said nt・waveに電話する。聰ならにか分かるかもしれない。もしかすると、こないだのエリカとの事を話さなければならなくなるが・・・ここまで事態が悪化している以上それも避けては通れない事を覚悟した。

「聰？・・・俺、智雄だけぢ・・・」

「おお！噂をすれば・・・くくく、お前大変だな。」

「なにが？」

「あれ？俺が何にも知らないことでも思つてゐるのか？」

「あつと亜希子の事を言つてゐるのだらう。

「ああ、亜希子さんの事なら今度行つた時にも話あつと・・・

「それだけか？・・・その先の話もあるだらう？・・・ヒリカの事

！」

「…………そ、そつか、聞いたんだな……それも……悪い！今度話すから……それはそつと、お前ヒリカと連絡つかないか？」

「…………つぐもなにも、今来てるぞ！律儀にも振った男にまでお土産買つてるつてよー」

「…………やべーなんだなー！」

「ああ、なんか話があつたのか？」

「すげえこくから、引きとめておいてくれー！」

「せりやあこいナビ、きたばっかだから、まだ帰らなこと四ひこ・・・

「とにかく行くからー！」

智雄は駅まで小走りにタクシーを捕まえにでた。

10分ほどで大名の saint · wave にひいた。

「おつ！ 来た来た！ よつ 色男！」

と、聰がちゃかすと、カウンターに座つてゐるエリカまで振り向いて叫ぶ！

「よー・色男ー・転職の返事は決まったのかい？ · · · 明日が期限だよん！」

「 · · · · · エリカ。 ちょっと一人で話があるんだけど。」

「 · · · なあにい · · · やつぱり、あたしにしつく？ · · ·

「なあ、まじめな話なんだ！」

「うふふ、『冗談よー』でもあたしも本気だつたんだけどな · · ·

「それについては謝るよ · · · でも、あんな事するの、もう止めてくれないか！？」

「あんな事？ · · · どんな事よー？」

「とほけるなよー・亜希子さんに嫌がらせとか · · · 僕の部屋に勝手に入つたりとか · · ·

「ちよ、ちよっと落ち着いて！ なんの事？ あたし本当に判らないん

だけど?」

「……いやだから……」

「亜希子をさつて……智君の彼女さんでしょ? なにかあったの?」

「……お前……本当になにも心当たりないのか?」

「あたりまえでしょ! だいたいそれいつの話?」

「今朝から……やつきまでに有つた事なんだけど……」

「なにがあつたの? 落ち着いて。」

「だから、今朝から亜希子さんの携帯に嫌がらせメールや無言電話がいっぱいあつて……お、まけに、おれが部屋に戻ると、誰かが入ってきた形跡があつて……食事の用意までしてあつて……」

「ふーん……智君はそれが全部あたしがやつたと思つたんだ……」

「

「いめん……でも他に考えられなかつたんだ……ぐどこよつだけど……」

「ホントにしらない……第一、あたし今朝早くから下関に出張つて今帰つたところよ~ハイこれ智君の分。」

みれば、『フククツキー』なるお菓子である。（下関ではフグの水揚げが有名だが、地元では『フグ』ではなく『フク』と呼ばれている。）

「でも……俺が寝ている時にキスマードつけただろ?」

「……うん。それはわざと。『メン……でもそれくらいで別れちゃうような女なら、あたしと付き合つたまうが絶対にこいつて思つたから……どうなつた?』

「どうなつたじゃないよ……久し振りに冷や汗かいたよ。でも許して貰えそ。」

「そつか……やっぱりね、智君が惚れてる人だもんね。……」

(本当にエリカではないのか?)

「?!……ちょっとまで? エリカ! お前なんで亜希子さん、て名前で彼女だって解つたんだ?」

「……ごめんなさい。それも謝つとく。じつは、智君がここのお密さんと付き合いだしたらしくて……聴から聞いて、あたし慌てちやつて……それで強引に誘つたんだけど……結局智君てば、馬鹿正直に話しからうんだもん……」

「それについては、俺も謝つとく。すまん智雄!」

聰が「コーヒーを一杯持つて一人の座る席に坐つてきていった。

「……なんで、亜希子さんとの事……」

「実はさ・・前々から亜希子さんにお前の事色々聞かれてて・・・物凄く好みだつて、で、あの日、三人だけで結構飲んだ日。あの時、亜希子さんがお前の事『お持ち帰りします』って言うもんだから・・・ついつい、エリカに面白くつて喋っちゃつたんだよ。そしたらこいつすんげー怒りだしちゃつて・・・こいつもお前の事狙つてたのな（笑）」

「だいたい聰は無責任よ！亜希子さんつて人が結構いい人だつたら良かつたけど・・・」

「ちよつと待つて・・・じゃあ、あの日から聰は判つてたんだ。」

「ああ、お前にここに来づらいとか思つてたんだね。」

智雄は多少ふくれつ一面で頷いた。

しかし、エリカの言つとおりだとすると・・・いや、そもそも今回の出来事はいつたい誰が仕組んだ事なんだろう。

智雄は振りだしに戻つてしまつた謎で頭がショートしそうになつていた。

「エリカが俺に謝らなきゃならない事はそれだけかい？」

「ちょっと”ハツ”とした顔でエリカの表情が歪む。

「…………、ゴメン……もう一つ。」

「なんだよ？」

「あたし、キスマークだけで気付かなかつたら意味がないから……自分で電話かメールで存在教えてやろつかなつて……智君が寝ている時に……」

「携帯開けて、アドレスを盗み見したんだな！」

「…………うん。本当にごめんなさい。……でもメールも電話もしてないんだよ。」

「本当に本当にだな？」

「本当に……これだけは信じて！それに智君を送つていつた日……すく辛くて、結局この店で酔いつぶれてしまつて、その時に聴に話聞いて貰つてて……何故か気がついたら携帯失くしちゃつたし……」

「…………？」

「ああ、帰る時になつて携帯がないってわーわー騒ぎ出したもん

な、この酔っぱらいは。」

聰が横から補足した。

「それで？・・・そのまま携帯みつからないままなのか？」

二人揃つてうなづく。

では、件の脅迫メールはいつたいだれの仕業なのか？

智雄はさらに聰に問いただす。

「他にお客さんとかいなかつたのか？」

「ああ、いなかつたよ。結構遅い時間だつたし・・・・あつ」

「なんだ、誰かいたのか？」

「いやあ・・・ヒリカの話を聞いたのは俺だけじゃなくて・・・
優香もなんだ。」

「優香？優香も来てたのか？、それで？あいつも今度の事全部聞いたのか？」

「うん・・・前からあたしが智君の事で相談してたし・・・今度も励まして貰つてたんだ。」

もしかしたら・・・自分は最初から思い違いをしていたのかもしない。

コーヒーを飲みながら、一連の出来事を整理する智雄だった。

智雄は母親に電話をかけた。

疑心（後書き）

賢明な読者の皆さんには・・・もう謎はとけたのではないでしょ
うか・・・最終話ちかいです。

結末（前書き）

いつたい誰がこんな事をしたのか？！
あなたは判りましたか？

結末

あれから3日が経っていた。智雄は会社に行き自主退職の意向を伝えた。しかし会社側は早期退職者をつのるつもりだったらしく、会社都合での退職、おまけに明らかに、『色』がついた退職金と有給休暇を貰い、一足早くの退社となつた。

帰り道にビデオ屋により、借りていたビデオを返却して、その足で、エリカの勤める会社に向かつた。

想像はしていたが、やはり形ばかりの面接を済ませただけだった。
(面接官の口からこいつそり採用を伝えられた)
エリカにはそういう風には聞いていなかつたが・・・彼女の口利きで採用が決まっていて、今日はただの顔みせ程度だつたらしい。

ちょっと情けない氣もするが背に腹は代えられない。

生きて行く為だ。

その一日前の夜。智雄はわざと一七・三〇に帰宅した。

前田とまつたく同じように戸食隼にはティナーの用意がしてあった。

「おかえりなさい。」

「…………ああ。ただいま」

違っていたのは、そこに食事の用意をした人物が待っていた事だけだった。

「今日は智の好きな煮込みハンバーグを作つてみたの。」

「優香。」

「だつて……昨日はせっかく作つたのに、帰つてこないだもん！
きっとあの女が悪いのよあいつが智をだましてるのね……」

「

「ええーそうよ。ちよつと何回か寝たぐらいで彼女面して！エリカの携帯ちよつと借りたら……あの女のアドレスが入つてたから……

・へへへへ、いい氣味だわ。」

「優香……」

「どうしたの？大きい声出して。近所迷惑よ、わあ食べましょ。邪魔ものもいなし・・・」

「お前・・・・・こつた、何がしたいんだ？」

「なにって？・・・・・あたしはあなたの帰りを待つて、飯を食べさせて・・・・」

「お前・・・・もつ結婚するんだよな！？たしか年下の男と。」

「いいのよーあんなの！あたしは何とも思つてなかつたのに、ちよつと寝てやつたら勘違いして・・・・勝手にお父さんに気に入られるよにしてー・・・・お父さんもお父さんよーあんな見え透いたおべつかに喜んで勝手に結婚の話なんかしだして・・・・

「優香ー・どうしてだ？なんで？こんな事したんだ。？」

「なんで？・・・・・なんで？・・・・何でですつてえ？！？！？」

優香の顔が正氣を失う。充血していくて視線の焦点があつていないーーいきなりキッチンに走つて包丁を握りしめて、智雄めがけてめちゃくちゃに振り回す！

「止めるー・落ち着くんだ優香ー！」

「もとはと聞えざ、あなたがいけないんぢゃないーーあたしはあなたを愛してたのにいーー他に女は作るし、それでもよかつたのにいー！それでも良かつたのにいーー、なんで？なんで？お父さんに謝

つてくれなかつたのよオ……智が頭下げてくれたら離婚しないよかつたのに……あたしは別れたくなんて……別れたくなんてなかつたのよおお……」

「もういい！わかつたから、優香、包丁を渡せ……」

「全然判つてないいいいい……あたしがこんなに心配してるのにい！あんな！あんな！年増の泥棒猫みたいなのに騙されえ！おまけに！おまけに！エリカまでえ！！！エリカも抱いたんでしょ……中で何度も出したのねえ……あたしの中には一回も出さなかつたくせに……あたしのものなのよ……あなたの子供はあたしが産むんだからああ……あなたはあたしのものなのにしていい！なんで！なんでよオオ！……」

「……ひつ……」

気がつけば切りつけられた智雄の左上腕部に傷がはいり、血が滴つていた。

「あたしのことオーライしてくれないならあ……智なんてえ……死ねばいいいい！」

「止める……」

開けておいた玄関から駆け込んできた聰が優香を後ろからはがいじめにした。

「なんでこじな事するんだよオー優香ちゃんー」

「話してえ……あたしの物にならない智なんてえ……いなくなれば

いい！！」

二人がかりで優香から包丁をとりあげ、優香をタオルでしばり拘束する。

「はやく放しなさいよ……殺してやる……殺してやるんだから……。」

暴れる優香を聰が見張る。智雄はシャツを裂いてタオルで縛り止血しながら玄関を開けに行つた。

そこには、優香の両親が立つていた。

「お久し振りです。お養父さん。お養母さん。お呼び立てしてすみません。」

昨日の夜中、智雄は自分の母に電話をかけた。過去に智雄の部屋のカギを優香に貸した事がないか?といつ内容だった。ビンゴだった。智雄が引っ越してすぐに、

「忘れ物があるようだから、捜したい。」

と、優香から連絡があり、優香に全幅の信頼を寄せている母は二度返事で貸したらしい。

智雄が今の仕事を始めてからなので、営業にでている時間に合って鍵を作つておく事など訳もなかつたであらひ。

よく考えてみれば、部屋の中の違和感を覚えたのは初めてではなかつた。

いままでも、優香は部屋に侵入を繰り返していたのだらう。

裏がとれた時点で、智雄は聰に仮説をたてて話し、いやとこいつの為に外で控えてもらつていた。優香の両親にも朝から事情を話して呼んでいたのだった。何かしらの予感があつたのか、母親は・・・

「やっぱり・・・」と一言漏らしていた。

優香は離婚してから少しずつおかしくなつていつたらしい。

母親だけは薄々感づいていたようだつた。しかし、父親には逆らえず、優香の味方にはなつてやれなかつた。そういうながら気の弱い母親は背中を震わせて泣いていた。

もともと親思いの優しい性格があだとなつて、自分を殺して生きて

きてしまった。

智雄との離婚をお養父さんが決め、また今回の再婚が決まった時も本人は逆らわなかつた。多分、その時すでに壊れかけていたのかもしれない。

おそらく、再婚話が出た時に少しでも智雄が優香の真意を問い合わせれば、こんな歪んだ結末は向かえなかつたかも知れないが・・・すべて過ぎた事だつた。

優香は結婚を取りやめて両親に連れられ、地方の病院に入院したらしい。

智雄もかすり傷だつた為、警察にはもちろん連絡していない。

しばらくして様子が落ち着いた。と養母から電話で聞かされて智雄は・・・

せつかく生まれてきた自分の人生。『誰かの為ではなく自分の為に生きる事を覚えて欲しい。』

智雄は優香にそう手紙を書いて送つた。

さて、亜希子との事だが……結果からいふと白紙に戻つてしまい合い鍵も返した。

事件の次の日、エリカと亜希子と智雄、三人で話し合つた。亜希子の声掛けによるものである。

エリカとのセックスで、一回も避妊なしで中に漏らしてしまった智雄だが、それを亜希子に言わされて（セックスのすべてを喋られた。）エリカに亜希子は直接聞いた。安全日だったのかどうか？？

答えはノーだった。（その時点で智雄は真っ青……）エリカは亜希子に気しないでほしい！好きでそうして貰つたのだから、たとえ妊娠していても一人には迷惑をかけない！と最後まで言い張つたが・

亜希子はこう言った。

「赤ちゃん出来たら、この人と結婚してあげて！」の人、父親にしてあげたいの！多分、父親にならないと大人になれない人だと思う。あたしが産んであげられたらいいんだけど……前の結婚でも出来なくて、それが原因で離婚しちゃったし……」

黙つて聞いていたエリカが何か思いついたような顔でこう切り出した。

「じゃあ……こうしませんか？……あたしが妊娠していたら、あたしが智君貰いますから、その代り、妊娠してなかつたら、亜希子さんが貰ってください。なんなら子供だけあたしが産んでもいいですから。」

「おいおい……俺の意思は？」

そういう瞬間女性陣の一人が冷たい目で智雄を睨んだ。

「こんないい女が一人も候補に残ってるんだから！文句言わないの！」

「そうよ！だいたい自業自得でしょ？なに贅沢いってるの？」

何もいえない智雄だった。

「お前……」の年になつてなかなかそんなにもてないぞ？…「うらやましいなあ……つぶ」

「聰一なに笑つてるんだよー人ゴ」と思いやがつて…」

誰かの為にではなく、自分の為に生きていこう。やつ思ひ智雄だつた。

結末（後書き）

- ・ まあもしかしたら、二人ともものに出来たのかもせんが・・・
- ・ 今まで読んで頂きましてありがとうございます。
- ・ 次回作でお会いしましょ~♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5426f/>

誰が為に

2010年10月9日18時32分発行